不幸かどうかは

四月某日――。

「あ、先輩。おはようございます」

　早朝、けたたましくなるインターホンがうるさくて玄関を開けると、そこには制服姿の後輩が立っていた。

「あ、ほはよう」

「先輩、あくびをしながらでは正しい発音は出来ませんよ」

「君がこんな時間に来なければ、あくびをしながら挨拶することも無かった」

　今何時だと思っている。朝の四時だぞ。それだと言うのに俺と違って全く眠気を感じさせないこの後輩はどうかしている。

「良かったじゃないですか。貴重な経験ですよ。普段孤独で、孤高で、教師からも腫れ物扱いの先輩の貴重な肉声。先輩の初めて、私で良かったんですか」

　朝四時から誰かを殴りたいと思ったのは今が初めてだった。

　その後、後輩は、行きたい場所がある、とＬＩＮＥで連絡してくれていた通り俺に車を出すようにせがんできた。

　最初は嫌だと断っていたが、「そろそろガソリンも入れ直さないといけないのではないですか？」と何故かこちらの事情を把握しているようなことを言ってくるので、車を出すことにした。

「それで、君が朝早くから行きたかった場所って？」

「あ、そこの信号右でお願いします」

「もっと早く言え。進路変更も大変なんだぞ」

　四時、そろそろ五時に入る時刻ではあれど車通りも中々に多くなり始める時間帯。こっちはメガシャキ飲んで頑張ってんだから、すぐ着く場所であって欲しいが、もう随分と街を離れてしまったな。

「あ、ここです。ここ」

「何⁉　ちょっと待て！」

　後輩が指さした場所を既に通り過ぎてから言われても困る。Ｕターンを一回して何とか備え付けの駐車場に停める。

　着いた場所は俺には覚えのない神社だった。

「先輩も一緒に来てください」

「何で？」

「何でもです」

　この後輩は俺が三年、正確には二年の末からの付き合いだが中々どうして譲ることを知らない。一度言い出したら相手がその行動や発言をするまでねちねちと外堀を埋めて、そうせざるを得ないという考えにさせられてしまう。

「わかった」

　仕方なく、俺は車を降りて鍵を掛けて後輩について行く。

「しかし、君が神頼みだなんて珍しいこともあったもんだ」

「確かに私は無宗教ですが、日本人ですから神頼みの一つや二つしますよ」

　後輩に言わせてみれば日本人の宗教性は異常の一言につきるそうで、日本人はその大半が無宗教であるにも関わらず、神社仏閣に教会と宗教施設だけは嫌と言うほど全国各地に点在している。そして誰もがそれらを宗教施設と知らずに利用していることも多いそうだ。

　それもそうだろうＳＮＳが発展した昨今、初詣はある種ファッションショーのような扱いを若者の間では受けている。

「先輩、自分と同い歳の層を若者呼ばわりとは随分と老成していますね」

「いや、年老いた覚えは無いんだが……って俺、あいつらが若者なんて言ったか？」

「ええ、言いましたよ。そのお口で、音として発せられています。私の耳が覚えていますよ。そして、あなたの心も」

　表情の無い顔で後輩はそう言ってくる。

「……そうか、ならそう言うことにしとくか」

　その後、境内にたどり着いた俺は、神社と言うのだからお参りをするものだろうと思っていたので、賽銭箱の方に向かっていると、後輩はそれとは異なる方向。おそらく神主さんの家へ向かっていき、インターホンを鳴らした。

「お、おい」

　慌てて止めに入るも、後輩の手は止まらない。時間を空けてインターホンを押す。

　すると中から人が出てきた。

「誰じゃ～？」

　眠そうな目をこすりながら出てきた老人が後輩の姿をとらえると、先ほどまでの眠気顔はどこへ行ったのか、と言う勢いで絡んでいる。

　あれでは爺さんと孫娘だな。

　その光景を見ていた俺を後輩が手招きする。それに続いて爺さんも同様に手招きしてくる。

　その後、後輩は爺さんと話してから部屋を出た。去り際に後輩は爺さんから封筒を一つ貰っていた。空の方はどこか明るくなりだしていた。

　車に戻ってエンジンを入れて、シートベルトを締めて、サイドを抜いて、近場のガソリンスタンドに向けて走り出す。

「あの爺さんとは一体どういう関係なんだ？」

「私のお爺様ですが、先輩。もしかして嫉妬ですか？」

「冗談を抜かせ、あの部屋には孫娘の写真があったが、お前とは似ても似つかないぞ」

「おや、見られていましたか」

　後輩は意外そうに語るが、こいつが俺に写真を見るように爺さんの話を誘導していた。

「あの方は、既に息子夫婦を事故で亡くされていて、最近お孫さんも亡くされて、それで偶然にもあの神社に立ち寄った私を孫娘だと勘違いして色々と援助してくれているんですよ」

「ならさっき貰った封筒の中身は金か？」

「ええ、十万前後入っています。生活費の足しにしろと貯金を崩しているそうです。まあ、普段は手を付けていませんが、どうしても足りない時に少し程度ですが」

「意外と良心的なんだな」

「違うと思っていましたか？」

「そりゃあ人間だからな」

「私は先輩とは違って、実家からの援助を受けていますから」

「それだと俺が実家から見放されたみたいに聞こえるんだが？」

「実際そうでしょ、先輩は――」

「おっと、そろそろスタンドが見えてきたぜって、レギュラー百三十円⁉　高⁉」

「ここは港から離れてますし、相場としてはあんなもんじゃないですか？」

「馬鹿言え、それでもポイントカードも無しにあの値段は無い。近くにエネオス無いかな？」

「先輩、見苦しいですよ。お金もこちらにありますので、おおよそ三千円分くらい入れてあげれば満タンになるでしょ？」

「誠に不本意だが、爺さんのすまん！」

　封筒の中から諭吉を一枚借りた。諭吉が十人も居るのだから一人くらい拝借したところで問題はないはずだ。

　人の金で入れるガソリンがこんなにいいなんて、いつもはバイト代から自身のガソリン代を捻出していたが、こんなに身体が軽いと感じるのは初めてだった。もう何も、怖くない。

「先輩、死亡フラグってご存知ですか？」

「セルフじゃないのかよ！」

　スタンドに入った俺はまさかの店員が入れてくれる制度だと知って、絶望した。

　ガソリンを満タンまで入れ直して、再び走り出す。その間話は再び老人に戻る。

「あのご老人のことを不幸には思いませんか？」

「心にもないことを言うな。お前風に回答してやろうか」

「お、いいですよ。是非聞かせてください」

「あの爺さんは、別段自分で不幸だと思っていない。愛らしい孫娘が会いに来て平穏無事に暮らしていると思い込んでいる。だから、思い込んでいる間は幸せだから、あの老人は不幸には該当しきれない」

「……モノマネの割には声が似てませんけどまあいいでしょう。初回なので及第点です四十二点をプレゼントしましょう」

「声は無理だろう。てか、何点満点なんだ？」

「百点満点ですが？」

　言ったよ。言ってのけたよ。この後輩。百点満点中の四十二点と言えば俺が高二の時に化学の試験で取った年間の最低点じゃないか。どうしてこいつが知っている。

「どうしました、先輩。お顔が怖いですよ」

「何でもない」

「もしかして、四十二点なのが不満ですか？　でしたら四十八点でも……」

　今度は俺の一年の物理の点数。こいつ二年の時のであればまだしもこいつが在籍していない一年の時のことをどうして知っている。

「話は変わりますけど先輩。お子さんはお元気ですか？」

「……さあな、勘当されてから会ってない」

「ご両親は父親に会わせる気はないのでしょうか？　もしお子さんが大きくなって自身の父親について訊ねた時には、どう説明するつもりなのでしょうか？」

「さあ、そこはアイツらがどうにかするだろうし、家の一族は先祖代々男女問わずに母親に似る傾向にあるから、顔つきは心配する必要はない。それに妹からも大した疾患や病気はかかってないって定期メールで届くし」

「それは良かったですね、何せ交配相手同士の関係上何かあってからでは遅いですから妹さんも気が気でないでしょう」

「下らない話は止めにして、そろそろ着くぞ」

「またいつものコインですか？」

「四百円で打ち止めしてくれる良心的なコインだ。他は上限無しだったりなんだから」

「そろそろ学校に停めてくださいよ～」

「職員駐車場に停められるか！」

　来た。来てしまった。

「そろそろ出ないと遅刻しますよ？」

「いやだ。高校は刑務所！　行きたくない」

「先輩は三年ですけど、私は二年なので、あと一年の服役ですね」

「だから行かない。俺は何も悪いことしてない」

「いや、しましたよね？」

　後輩が俺を力づくで車の外に引っ張り出す。

「やめろ！　離せ！」

　抵抗むなしく。出席単位が欲しい俺は学校への坂道をとぼとぼ歩くのだった。俺はこの場合不幸だろう。というか不幸であってくれ。